「神は約束に従って」
使徒言行録 13:13－25

ピシディア州のアンティオキアに到着したパウロとバルナバは、安息日の礼拝に会堂に入ると、会堂長から「何か会衆のために励ましのお言葉があれば、話してください」と言われました。この会堂長の招きに応じてパウロは人々の前に立ち、語り始めました。この説教は、使徒言行録が伝えるパウロの最初の説教です。では、パウロはどのようにイエス・キリストの福音を語っていったのでしょうか。

パウロは、これまでのイスラエルの歴史をとうとうと語ります。出エジプト後の 40 年に及ぶ荒野での生活、カナンの先住民を滅ぼしてその土地を与えられ定着したこと、サムエルに至るまでの士師の時代、そしてサウル王の即位とダビデによる統一王国の成立までが語られていきます。

もしかしたら、古代イスラエルの歴史は、現代の日本人の私たちとは関係のない遠い外国の昔話のように聞こえるかもしれません。しかし、そうではありません。パウロはここでイスラエルの歴史を振り返りながら、その歴史を「神が」と神さまを主語にして語っています。神さまはイスラエルを選び、これと関わり、この民の歴史の中に、御自身の憐れみを、また御自身がどういう方であるのかということを顕されたのです。ですから、旧約聖書に記されているイスラエルの歴史は、単なる民族史ではありません。神さまが、イスラエルを「選び出し」「強大なものとし」「導き出し」「耐え忍び」「相続させ」「裁く者たちを任命し」「ダビデを王の位につけ」られたのです。

パウロは、イスラエルの民を導き続けてくださった神さまの恵みを一つ一つ数え上げながら、大きな歴史を語っています。それは、神さまの救いの歴史です。そしてその歴史は、ある一点において頂点に達しています。「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです」（23 節）。

この神さまの救いの歴史の中で、神さまは絶えずイスラエルに働きかけられていました。しかし、その神さまに対して、イスラエルの民がいつも従順であったわけではありません。何度も何度も神さまに逆らう歩みをしていました。彼らの歴史は、信仰に満ちた神さまに忠実な歴史ではありませんでした。しかし、にもかかわらず神さまは、そんなイスラエルをお見捨てになることはありませんでした。なぜでしょう。なぜなら、それが神さまの約束であり、神さまの御心だからです。

神さまはアブラハムに「わたしは、あなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする。王となる者たちがあなたから出るであろう。」（創世記 17:6）と約束されました。また、ダビデに対しては、「あなたの身からでる子孫に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする」（サムエル下 7:12）と約束してくださいました。この約束のもと、神さまはどこまでも人々を招き続け、憐れみ続け、恵み深く臨んでこられたのです。

私たち人間なら、こんな民は見捨ててしまえと思ってしまうかもしれません。けれども、神さまは、ご自分に背き続けるイスラエルに対して、「わたしは激しく心を動かされ／憐れみに胸を焼かれる」（ホセア 11:8）と言われるのです。その憐れみのゆえに、その御心の頂点としてイエス・キリストを遣わしてくださったのです。

私たちは、いつでも神の子としてふさわしく行動しているわけではありません。けれども、神さまはそれを十分承知の上で、なおも私たちを「神の子」として新しいいのちに生きる者としてくださるのです。それは、私たちがそれにふさわしいからではなく、神さまがそうすることを約束してくださったからです。たとえ私たちが神さまの愛を裏切り、拒否することがあっても、神さまは私たちを選び、愛し続けてくださっているのです。

イスラエルの民は、ダビデにしてくださった神さまの約束を千年、待ち続けました。その間には、さまざまな出来事がありました。国が滅ぼされるという耐えがたい苦しみも経験しました。神の民イスラエルの歴史を貫いていると信じてきた神の慈しみと真実が、じつは単なる幻想に過ぎなかったのではないかという疑いや迷いが生じたこともあったことでしょう。

今日、私たちの人生においても、生活を脅かす病と死、裏切りや憎しみ、また人類全体を苦しめ続ける戦争と破壊、搾取と貧困、そのような中にあって人類の歴史を神の慈しみと真実が貫いていると言えるのかと問わずにはいられないことも多くあります。しかし、その私たちの歴史の中にメシアが現れてくださったということによって、神の慈しみと真実が一貫して歴史の中に流れていることを確かなものとされているのです。「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださった」、これこそが、私たちに与えられた確信に満ちた答えです。

私たちは、この神さまの愛と憐れみを、励ましの言葉、慰めの言葉として、今日も心に刻む者でありたいと願います。